



# 混迷を極めるタイの政治と民主主義

## —選挙から占拠、ストリート劇場—

やぎさわ かつまさ  
八木沢 克昌

●シャンティ国際ボランティア会 (SVA)・地域ディレクター

2013年11月25日、タイの首都バンコクでインラック政権の退陣を求める反政府デモ隊が外務省や財務省のビルに突入し一部を占拠した。この事態を受けてインラック首相は深夜、省の職員が職務を果たせずに国家の安定を脅かすと、バンコク市内と国際空港がある周辺の県に治安維持法を発令した。

財務省にデモ隊1,000人が突入した際には警察官の姿はなかったという。他の国では考えられない姿である。武力をこの時点で行使すると政府が負けることになるからだ。抗議デモは与党タイ貢献党が11月1日にタイのタクシン元首相を含む恩赦法を強行採決で下院を通過させた前後に始まった。タクシン元首相は2006年のクーデターで追放され、現在、国外逃亡中である。タクシン元首相は、クーデター後に設けられた組織が立件した土地の不正取引で有罪判決を受けている。帰国すれば収監される。

抗議運動はタイのタクシン元首相を含む恩赦法がきっかけだったが、実妹のインラック首相が率いる「操り人形政権」と言われる現政権打倒へと目的が大きく変わった。インラック首相率いる与

党も恩赦法を廃案にすると発表し、上院も恩赦法を否決した。それにも拘わらず抗議運動は政府は信用出来ないと一気に政権打倒へと進んでいる。

タイの下院と上院はタクシン元首相系の貢献党が過半数を握っている。野党の民主党は選挙に連敗中で、選挙では政権を奪還出来ない。タクシン元首相は警察官僚出身で、通信事業で巨額の富を築いた実業家である。2001年の選挙で圧勝し首相になった。これまでの政権では顧みられなかった農民や都市の低所得者層に、低額医療制度や農村開発基金等の手厚い政策を進め、農村と都市の貧困層に支持基盤を確立した。一方で、都市の知識階層、既得権益層、中間層からは強い反感を買い、その対立が激化した末に2006年のクーデターで失脚することとなった。

タイではこれまでクーデターが頻繁に繰り返されてきた。1992年には軍事クーデターによって選挙を経ずに首相に就いた軍人のスチンダー首相に対し、数十万の大規模な抗議行動事件が発生した。その結果、軍が発砲し多数の死傷者を出したが、双方の指導者が国王の前で平伏するという世界を驚かせた国王調停により混乱が解決した。



バンコク中心部のデモの様子

その後も2008年には国会の包囲、首相府の占拠、バンコク・スワナプーム空港の9日間のPAD（民主主義のための人民連合）（黄色シャツ）による占拠、憲法裁判所命令による選挙違反による与党3党の解党が起こった。また、民主党が政権を握っていた2009年には、UDD（反独裁民主国民連合同盟）（赤色シャツ）がASEAN首脳会議に乱入して首脳会議を阻止、その後、バンコクでの流血の衝突という血のタイ正月となった。この時も警察は制止することなく簡単に国際空港が占拠されている。また、占拠を許した政府側の責任者も責任は問われず、占拠した側も実質的に罪は問われていない。国際空港の9日間の占拠など他の国ならテロ行為としてその場で銃殺されることも珍しくないが。

その後もUDDは、2010年4月からバンコク中心部を約2ヶ月に渡り占拠した結果、武装した治安当局による強制排除と首都中心部での市街戦により、死者85名、負傷者430名を出した。現在、タクシン元首相にもテロの容疑で逮捕状が出されている。当時の民主党のアピシット首相は、国会の解散と総選挙実施を提案したものの10日後には

撤回している。

過去20年間のタイの政治と民主主義をタイで実際に見ていると、選挙に負け続けて議会では勝負出来ないとなると、「場外乱闘戦」ともいえる抗議集会で首都機能を混乱させて政府に圧力をかける「街頭闘争」、「占拠闘争」、または、与党の立法を憲法裁判所等に訴えて施行を拒んで政党の解散命令を引き出す「司法闘争」に訴えている。

「選挙」とは異なり、こうした国家を分裂しかねない「街頭闘争」、「占拠闘争」に訴える背景には、階層社会とも言える貧富の格差や、汚職にまみれた富裕層代表の政治家と政治に対する国民の不信、そして、結局、与野党が自らの権力と政治的利権にしか向き合わない現実と背景がある。さらに、中立であるメディア、知識人層もまだ成熟していない現実がある。一見、経済的に発展したかに見えるバンコクは、ちょっとしたきっかけで群衆の不満の爆発とアジ演説の街となる。まさに「街頭型闘争劇場」である。もう20年もその構造は変わっていない。